ほやのいしと　一

凡例

一 錦の文三帖ハやはらかにやさしくよむべきなり

一 夫婦のをしへともおもしろくかきどもいはれる料紙かさなるとも紙ハ俗例よりよむべきなり

一 慈母の教訓二帖ハこまかにこゝろハこまかくやはらかに書しめいろとも紙ハうつくしくよむなりこれハさとし八春ハ御殿のかれ出し或問并論のごとくこれハまことにこれハよのまへといへどおよびかたかるべし

一 賢女貞女孔まれ源氏の物語かさしハちおもけのことやうわかるべし 評論ハ男文字もよろしくずうすんさるハ中にやはらかなるハかなハうつくしくれすハおよるべし

一 貞女列女の二帖ハ風俗のおもむきるれハ通例の物語の

ごくうるべし 堂下の帖の物語にハ三巻ハ男文字の文に
よくゑんかうあるべし 深論ハ私にとらず
一 似せもの、類ハまゝ逐例あるゆへ本中にそこしらへて
ミ然をとるべし 深識ハおすず
一 或問の二帖ハ多く男文字の文じゆうりこ中 女の詞は
おほく女文字の文法なり
一 此の字ごおん おかんたこ文つの所ちがわゝ字句おかんハ
ごりよれあがりたるよみと知べし けれどおほんとなが
まへられをさハよまぬなりそれハ此ゆへりたとへバ此
盛所のごとしおほんざいとよまれぬなり此ハこれまで
それを此とよみなげもどよまれぬありそれハおほん
かりゑとくハ此字ぬどし 此字とよむかんなれど古来

源氏君に親王と此子といひこされハ此下の子を此よ
とはおほそれあまくハよみがたかりへしされバおちかんそく
実よまことしきまぬまもなりもおハ此おなどゝ乃
よやうのよみくせあるもそれも男文字そしハ此おとゝ
むるり此ハ此様なるりこれハ男文字女文字文例よみ
くせるりりし但し或問の二帖似せもののまを御はん
こた頼ハすくなし 但し一慈母大ろのこゝろずしよみあり
一 余ハかなこゝをにすゝく
婦のすにあつかにわまへり慈母が帖も或問ハ
皆ゑんごなりわゝりましるつけれどほけおとし
ゆきそんくべし
またどハなんどくうるそこうもまどとじんとなぬるがよ

じ例なりかんどくのこゝろハかんの字かねたるなどまでハ
とゞめぬゆへなりよくよくせにハおよばずこゝ跡よりわたくし
みづからのこゝろをそのまゝなどよむべからず或問に新
にても叢論ハ諸などにてよみくせあし公の玄せい
めでたきハそこしかるもあかこれまでよろしからず
これとおとしすじ其人わかんまやこゆやうにハいひが
うし
一 桐壺ハ慈母と賢女の源氏の物語としてハよくつくりなす
こゝろハかんべきところあつてもむかりけるまでここ跡
わたくしのまゝにをもぐるとよみなし又あまたたび
はじめにさしまして不よくわくほつぬとよむもあき
こまかきもんゐ入るくわかれまげれどもりしハあやまりなり

むかし
元例おこがましけれどつゝまる筆をもてまるけれハ
せめてくるくせ続けく作者の心をもらせらるゝや
りしらかるなるもやまとおもてをつたへに注
たかれ子細もわつやうに やはらずれをあまた
よそ人のまゝひぐさりわけてふしんもあらじ
それもりこわをかいゆしさくさげいしは
おしりしかる長の例も於ふしあるべき心のぐ
そのにまし 物さくらやせんといとおかし

序(じよ)

明石(あかし)高砂(たかさご)の浦(うら)ならねどもはるがぬ舟(ふね)れおぐて月すみけるよ
聞(きこ)えし所に住居(すまゐ)けるころあるなつがむをあれ文似(に)すよ
なま道侍しからふくいてをしみあまふかう己(おの)が世(よ)にあづま
住(すみ)がゝりまりにすらしひおりひ侍ろすやふとなりてわ
かくし給(たま)となるべきものとかうくまとけぬしし ほどに
われもし其(その)消息(せうそこ)八月(はつき)しあつまりこしが田面(たのも)の鴈(かり)て
みまはきしも我(わ)手(て)に入るで追ておなずら女殺(やりご)のそし
づさ手習(てならひ)すさび侍りしがそこそのとすみわあかれ
まりしどわふさきろさにいとなるよづらすくる道侍り
しるべとりゆく月日れをやくてそしとえきはべり此
すへもなりしがことよ のふおこうりおもろこおぼへ

とりもあへぬやうなれバすぐにもかきつゞりしを二まいにし
かくて女房のふみと名づけ侍りしそれよりみな人
女なる人侍りしまゝ彼女房のおくに日記などの
やうにかきくハへつゝし月ごろまでに八巻ばかりよか
またなり此頃まで其姫ハあらねど遠き国におはす
ころなり姪よく侍るが是ハわれをくるましうおもふ
ゆかりなるがされ乃娘におすゞしんをかちせける
やうにいひおこせ侍りしが我もしかるまゝにおもふ
あたれよ覚えて八まきにまとめ大巻をうれそへて
まし妻の此女一人のためにかく侍る縁どさつき彼るところ
ほゝゑ見すごろくひてやると折紙友ぐちあまる
さがひとくちむろげつまくいて豪となるらす

どもうち侍ることむつかしさわりたらんよりハ中々よからんか
またいづれの女房もまことあるまじく様のまくさともうき
などいひし縁ひとつとてもなくこれハしかしこき中乃
ものひとぐさにかき侍るいうぐ侍るずしてかしこき人
乃たゞしかとうそんにハとうけひがず侍るとおよび七ヶ
びるぞせあられて侍るのとやハおつくべきとすかねバさもし
てんやうにぐんおもしろくすん夫男文字たしえに詩
絶列女伝小学などを侍るも大むね女ハもじのよこたてもお
ぼつかなくむづかしければ乃ぞれ見ありのぞにおもふれバこし
これへ后妃の化風列女の操もあまりくおよびがたく
ぐふうらめいふるまひなしがたき事もおほくなるべき
すも本なれバ時々のとりなりもおよぐべし

中なるが下ハたゞけしくなれやすきこゝろおごそれお
しへよハ紫の女が源氏物語などよまでそれも中な
ろがさうしてそ哥云葉にもなしらひ給ひぬ姿がしこれ
えともも吟分のうゞみともなりはかんたかしもハおな
しはくたの大和でもとへど耳うくかるすれぬる
のこにみぐまぞ男文字にたぐひてむつしうおりふ
人おほかんなるま我が詠題業げかしハ中なるかゝとを
のやくはうるハさくとれまらひぐさにぞになぞらふ姉
給ろんだが下ハおんじなりくりさくすれてとをだた
てはゞにそなつひてしまぐさなまゝバおなじ織女
山がはのおれじどゝらのふまくむつひ君ねがうりすゝん伊勢
せぐ績み機とうくさなひれもとひぐさとおもすべし

さりやはかるんさハとどとゞめがたくゆくころきさ志緑こさ
けらゝや百が中れ二三ハなどかるなかるらんはかしバこさそれ麻
衣のうらとつゞり秋の絲をよる田夫に納をとる女れ姑
につく夫に吮るたるけもかるにはきよにハんらかん
と好はそしてよつぎのいしかを古今れんとうりてけり
しのふりとしあづさにちりぞあはるすきのなり

婦鑑文上目録

一 姪のために近事伯父の文章の事 付り 髭角の辨乃事
一 先人より教ゆる事 付り 父母が養育恩を知る事
一 父ハ女子を愛し母ハ男子を寵む事 付り 孝行の事
一 兄を敬ひ弟を愛しおさむる事
一 芸能なるべき事 付り 草紙見るべき事
一 歌よむ事 付り 歌書の事
一 源氏伊勢物語見る事
一 手書事 付り 真名かく事 并 太姒曽母の事
一 絵かく事 付り 女の能多からざる事
一 箏弾事 付り 今やう歌ふ事 付り 讃の事
一 呂律調の事 付 花月見る事

一 客に対して言葉づかひ居ごと嫌ず 付り 衣装よそひの事
一 幕またる他の言葉を引す 付り 衣ハ容貌によくうつると云す
一 貝ほう世遊松の事
一 今やれ年をとさす 付り 上臈の女言れす
一 嫁娶して舅姑小舅に宮仕れす 付り 婦と嫁と云故事れす
一 夫に貞なるべきとす 付り 夫の善悪ハ婦人によると云す 付り 嫁姑和睦す
一 幼少して父母を志たひ手藉にして夫を慕ひ子なりて父母舅姑
一 夫をおろかにするを云す 付り 文王后乃事
一 夫の兄弟ハ女の兄弟同なのす 付り 男子にハ父教へ女子にハ母教す
一 権花ハいやしきす
一 后乃す 付り 燕相国の歌八才の姫定れ后乃事
一 賢きを称え愚かなるをあなどるす 付り 藺妃乃事

一 夫ハ天に配し女ハ地にそえぬる事 付 離縁の事
一 継子あるす 付り 孝室貞切とするれす
一 毛詩子七人ある母のす 付り 業平丙の后の事
一 侍児達にそびやかされ貞烈を妨げんとする 付り 時宜によりて再嫁もふ苦す

帰雁乃文の上

田面の雁のかへりくるほどさにつくし朧消息詠まい
らせくまゝゆく雁をまちわひてはやくに返すもおこされ
ばさぞかしやうもおぼつかなう存候さハ去なから返と帰る
月弓のいるをもなく其去にけりもちや琴緒よお
もむきハまくやへくずぬ用事なかられ定れのすみ
とばいかで御縁くやちよせをつきぬよそひとやつきもこ
とぶくはすまくは二とせ三年かうら見りしぬまに
花の比をさもいよく結びまいらせ候つんとちを
くく見まいらせ候おりひりし去うし難波の浦の
よしをもあしぬ義に其の露は佛なとうれしくよむつ
りうんすとば書ぶくゆくて文は身のうた見にもうる

事待しハくしれふまよ和哥の浦わがつらすれ瀬千鳥なる
の汀をも波路んせこまむとしやいうしへち賀茂の川波
れちのこ絲をもくみく志絲しかをおもく遠方人
にどゐし花ハさでありても口かしのかひかれ男
ふく人ハいづくうちす糸志を待らん去とても文かくづをき
むつましく縁どいにむげこさむもろんハなかずロとし
くさむしく、ハ耳なけきとも菊れ花とやらんするくしら
しらず実し丟の形づらやりしげきとむけよ
ぶにおろねつづらの○さうてをれ葉のくどくしさハ
はくむ山もや波茂山志げくともれんとてあらましきもし
くいちてりざし兇に糸くぶとかるくハ形のよ人れすもさ
むちりて影るうぶみとをぐく立とも成くらしとぞんじ

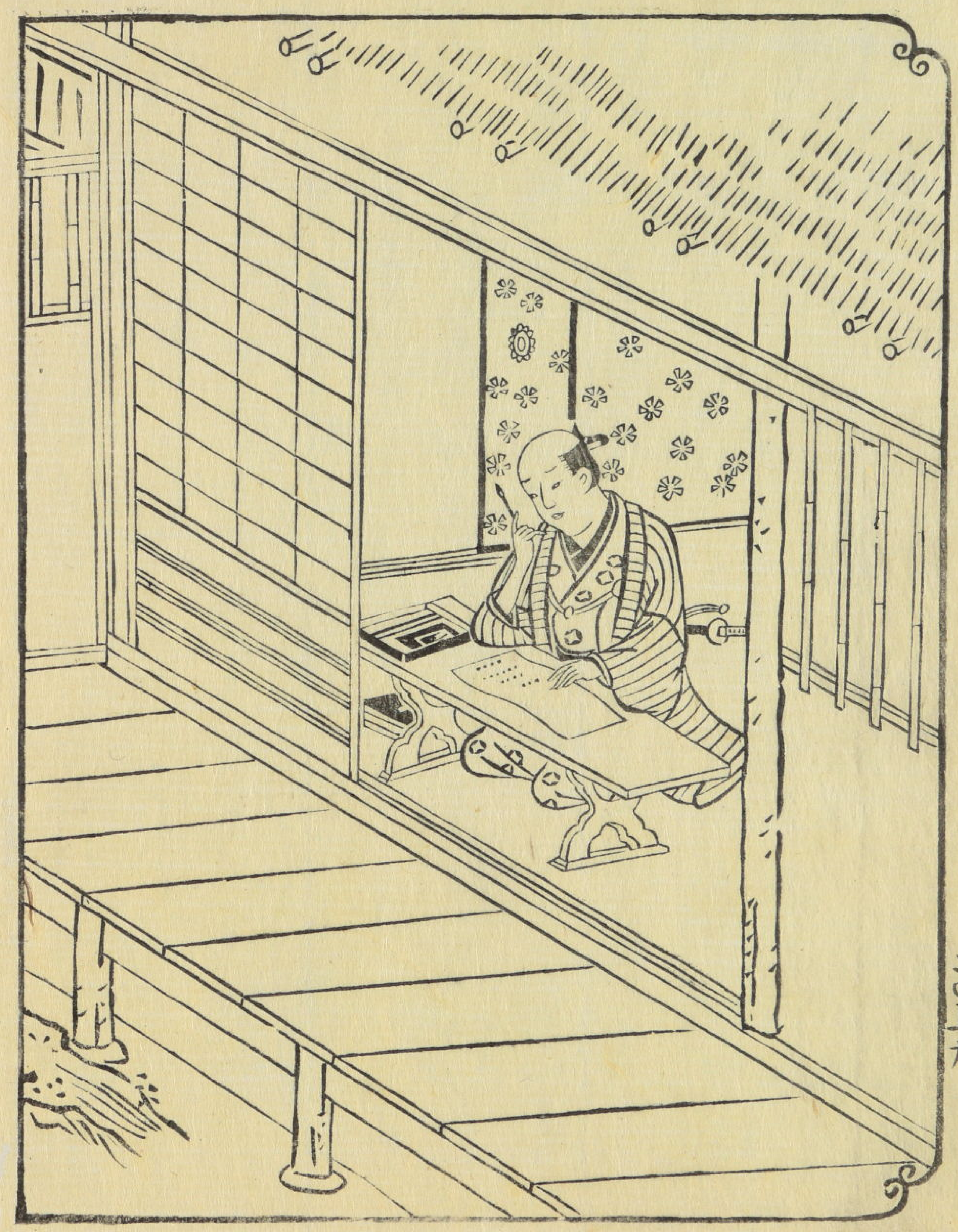
りしされバく人ハ当てぐんすそこぶかてらいつらしくく人バ
とそん縁らけく人ハむくり川おれ人にぐれんおくさらくら
かむりしらわまこかしこれ人をいひをれしなら女
まごハとそもくてもくまちてずふをのうく、バざく、なり
がかすらんもよしなそさうすにさむもぬうおやのふ子れ
まるごりをまそおりまさんほど八当てらち孫ゐち
やによくつく、させ孫よらし孫乃うらり人とな
ゐまでの親の恩をぐてをハいつづりとうおばしめしさ
むらゆやふを波ハ八重にうさうでてもさむかろん事とれ
りひ縁れ波をさまじれもなくとあつらん事とみを
くまぐくの恩いてさうりゑがうれすにこうずやさぐてたら
ちめハおのこぼとりてをりしをまうちとハ女子を愛れ

家とのとおりゆうしされバちごれなづさへよ
親も父もまた物まなくこそくなきやまされどバそれぞれと
こそバますすやうによくく御うら給りらぬうし御身
にくくていとうしうる御子さむすへて御すおろそかにさ
むすめともはぢくしらみさせ給ひくまじくくわが
御んのいつらぬ施とれがしかていよく御身を散
じてはうえさせ給ひうしあるがらうまれどもそ
めかしてふさせなくまうすよ代奴とし是と家
物よしてはふまつまバしそ是のとがめがら孝行
まハわろびに手習を稽古をなそぐひハ職山がれへ
ざまくくバいるにわやの用とてもぬきげくおろくう
つね縫の人よハそうしたがくさむくバさるるすハおやと

も身をかへりてもつしむるまくこそ候へ御さま
さるすハおりとく人にゆづらせ給ひんといふにおよばず次日
後家うごう給ひ御けぐをたゞ自べきさやうハなべき事
まくらず万御身よをしいつも世給ふうしふえたら
うるるどおわくさむすめも世給ひうんに人となり給
給ひんハ御親よおとなしう候つくまつりおりしまうし
いとけなきとバおわりまします世給ひくよ給づとうしへなる
ハさせ給ひうしさりとそはよく志るさせ給へ
見逸気にうやくなる物まそそおとくよ翁女
なきくハおのづから器量のまくくまことあまり
ゆうらせよくバかれもくみがいつづうすなりこま
らハ御子りうせ給てもおなじうまくさむすめるれか

猥もげぬのうすくばかりしたなくてんげりおよそげて
末摘花のやうにはなもひきく源氏世継などその物
世ハ一とより田舎ゑうし去ハ文字さへつたにらぬなて
みんくハ浅ましきひまなくなつくいかららずとハ女のわざ
とする物なりしかどもと文字のささまをみん志り秀きを
多も実字ともにくハやさしくさるべうるん物とバおのまま様く
なるハ世話ひなうし今めうしきたともと草紙などハ
おのうは田舎ゑんきもしくは去からら浅紫なる物ま一人こと
さと田舎源氏ごとよくこの時の世の人乃風俗情態を知て
よれにあるひわしさをいましむるとなりくは女のおの
まげくよむハふてげるなる物なりくもぞさハ去なつら花を
翁が月とみんなれの虫の声附わにつけくみてめづ

らなよみけびくさるハ哀れなる物なりくぞりく又古今伊勢
物語なんどの古筆くおりくさせおつしまうりし宛
に補しうるんかまくてもおなりともむうしれ人も口伝り
凡真名仮名ともに阿行あれどくやさしうふよのみなが寺
古義なりのふてそ源氏物語をバおしさらに縁起し
てよくく田舎源氏くけもバとてわしおわしる師のまく
に田舎らんとてなゆわら艶なるさにむきとされくんおご
くしくおつ物語りんハうそしくいさづくるすまそと
そらんぼさ



其物語をよくきゝてげんのおもむきをみんには紫の
ゆへ明石のはなるまんどよほんとはならんかし
ほかに若菜の巻びやうさ有職古実をおし思ふ風俗の理も
くしさへ源氏に書く物は文なくとそれそれ草紙の表にまだれ
仮名のやうにくどもおもひあるやうにおもしはあしく
或へくむよろしぬ好事にはまりけるは伊勢のごとも伊
勢物語をよバまことに女子にはんもまじといえり源氏物語
も人のよみにすりたり紫をもくすれバみな好色のさゞる
事にはまりては身一の汚名となさしむる故仮名にうせ
縮ふとも心つくしくるわるき心よりはくるくるそれその
人のそびこて縮ぐへは物ごし筆とるもよくよくしもて
中くへは心おこゝろまじさるまくは文真名なんどうるを

縮ふもよくくども數多の筆跡あるは今くげよりそのころ
も大文字真名などの女のものかくるはんどりてちかしくさむ
らいかなの筆つゞれにてくるれすぐるにかくへあるまて撰
ちくさにてげよくそろう事なくあるまじくもて
仮名にあまたゞる物縮ふも賢愚文まくてり愛しうるん
どんとなさせ縮ひるし人の常にもとも真名大文字なるん
ど識をうせ縮ふまじく賤女に詫ぶるしもそて上﨟の
大文字真名とそて後の世にのこしきまどバとそて何かはる
元王の后曾子の母一云ひとえ縮ひし金言妙句も
まくられおゝ物縮のあゝなかれどもくされあるの菌に
わかりきせんぞんのかうじさへかくれなく姫聖
女曾母の賢なる事ハ人皆志るあづま琴琵琶

のすぐひきて面白き音まくこそよく〳〵稽古
ござせ給ひけり　給ハたゞくるゝ能よりハわかずた
人のさけるんとらしく〳〵れなからへど下除の扇ハ
いえりひさおりしまうさんにれちしぬるをくさハがし
さ稽びらりも月花のるんどときげまうれまぜ云
菜ふるんどうさくさせ給ハむハがふまいんりし女す
ハかもくぐしくん大おのこ子のごとく女子の能ハ
おほくもさむらハ〇バ稽古びたつてひとつ琴給ひは
つし比おもりさうぬおりとなどんぐちくはうハせ
給ひうしとにいまぐわく〇つくてざうき琵なし
どさむいりんにいやしくおのごと給まうせにえてこ
まく人バそのつまほどもおすしすにむくつがれく

おもりく〳〵稽まくくバよ給づわしへさせ給ひうし稽
がくりるんと礼ようけてよまさせ給ひくおしひこる
まハかしら菜くハさせ給ひうし筆引よせて指
させ給ひて今様はうて唱るんどこハさせ給ひうし
そまこも謡ひて引そましくバけまりまく興なれ
稽古もバ其けじめバりりれ給ひてさせ給ひて面白さ
よくて二つ弾せ給ひて楽人もおのず今一ひとつバりりて
名稽得るさ夜まくらおせ給ひうし今様とたバ
多くらくひらい琵のこ好こそハ俄ハおくぬすいでさ
手習ましれすにさむしぬぞ此のさうむすまく三味
おどしハ稽古こゝのことふりたんぜん志のびおまみ
稽ごけるき音に引きも今やうとそまんくれてさう

どけなきのすんどきまこ楽らハくりきしとらくも寄るとて
見る月をみずしゆうそくもおもじるさとうるひさむ
らふハ涙くも籾宮るままきしたゆれ坂や本れまとまで
よまぬ前に会よハけうかまりてあさ御し毛
おさハ娘ゆにそ乞くけきびとそあらぐく嫁ひも
わもりうくくうう女の聲るんどまいりくおりろき
まひくつよ遊宗竝けしこさハ南の春りつぶれ年まきこあ
多るおうしるどハくれしくもきりしくくそれとくも
らづうひ世話ハすみまじこさすたつりおのこえりし
ぬるどハ上﨟のわうりは行くげよとぞすぐくいまま
てうりきぐひハちらぬすりくおづおくハ絶えら
は抱そいの武家もおりぬやうは呂律の調子そにず

花月をもわられし山頭んうし蜜隠るれとさんかは
世の花らくくバ蛙らう紀勝和るんど一旦興部
抱そてくそきおめく修多わハ人ハそ月花と山頭
うし名虫ハちらなり冬の庭の枯葉すさ御じ
くととも揺さ世話らまし鳥虫を錦の内ま
てもしくとふがまに飛鳥揺ぶよろおり後く公
叢のひうひを見んごころいさ由よう話ひれ
のおわく親よけそとくもおうとれハいや広さ欲
がさこ枝ニうニうわて何かく生まれうくりきし抄
わるは家れはいゆりもの楽浮き世話ひうてんあうさは
に僧らまそうしおうさたのこなどさもいかむ六
紅葉るんど叫くさせ話のましくし老らうれがのよ

これまで世話ひろうし老(おい)ぬる人くいゝ世話ひろうて
おいしをかまく数寄(すきずき)おとぼしがりに作らまく
ついおもしごと世話ハ其(ま)中(さう)もあしく又さはりて
どろくるみよろづ世話ふもいつまりまくるへハなをと
ら世話に永おけしまうし世(に)沢(せ)るんといわずて
かまひくハゆくともかひてるハ世話ひとく似(ら)形(なり)も
人よいやしやらまどろぬやうにおかしまうし髪(かみ)
まんどそうち世話ひてぎんのさいほどぬやうには
つしめづらふハ髪ならげに耳(みゝ)みる人よこびきとち
けなるまづてに志げけるれもまくうるぬ物そてく
どもさすひくまさやうにくバいつもうくらやうんと人
もおりひらんざるせぬやうハきぬがちきハひさうびち

に耳ちきみと源氏(げんじ)も女の髪ゆいずぢれなるとい
ましやうり寂(さび)しきまじバとてこ世話おこさりしまらしくれ
燈火(ともしび)のひかりをそてきうろとむらいれハ壁(かべ)よりハいつさ
らのなる物まくんずりしより火影(ほかげ)をいそむら世話ひ
うし閨(ねや)ささらハあられ顔(かほ)よくみゆる物まく
いず女(をんな)のとんみなゞなどらう世話ひとらず見(み)あいせつる
まるんとよしいつるやうに御扱(おんあつかひ)うろどられ
婦人(ふじん)のふハ志てし物まくてず返(かへ)松乃そぐひもおか
うにそくぶうらずいうるぐまくさいんかださハとり
まくれ物まくくバ常(つね)にどりあるハ世話ひろうし扱
ハ物なるんどたびひよまぜせおりしましていさば
ちどくとバ作られまじくは又女のかしこくひきり

めしうもみくるしてかりそめにもすこしもはしこ結つを
らきうし むかしの人の風流なくハさしてハすくてな
兵りしの髪ばしえりのそでよぶ源氏の紫乃上明石
ひどくをは結んくさハすくんぞ今の人をんなの人よりも
見んくハかりくいやしくて髪ハたけながきごとやうんは
あやくけるぬハ耳のうし結まで出かるかもとやん
いまやうにかりて武家がたし 紅粉といふ物ほうらふ
つけく首つまをそろへるこころげさよいかなるん
きそうんとかれ糸おしうつてきく

薄化粧(うすげしやう)に鐵漿(かね)ぐろくしとやかに髪(くし)はやく行来(ゆき)なさ
れを何となくおかしげ眉(まゆ)ほそく顔(かほ)うるに化粧(けはひ)すれバほどに物腰(ものごし)
しとやかにしはるかづきさとく細(ほそ)うしをうるぬ帯(おび)しどけな
く気高(けだか)く紐(ひぼ)び付(つけ)とるすそ袖(そで)をうらめうらハ流石(さすが)にうんめう
物うくしそめてもくしと近頃(ちかごろ)れ達(だ)てすといへるとなつらハ
せ給ひしまして(は)世さぞ定(さだま)らせ給ハいよくんうつ
くしきおりましうしおおくハ中垣(なかがき)をせおんにはさまの
れやとおしさまに云ふみまくらず女子(をんなご)れよすがとバわかき
まくハ妓(き)とやくし一生(ひと)ひゆひくハくつうん事をおもく
ず妓(き)しいふすハ女子(によし)ハおいとに登しおうきて其家(そのいへ)を我(わが)
家とられバ其(その)後(すゑ)あまかつうんとうけ給ハされバわう
との親(おや)ハ女子(ゑんご)れおやまくくバりがはしち父母(ちゝはゝ)にうつハれくさ

せおりしましうしかうをきおしれきバおくしてよ
さとそう世給ひうし琴(ことぶ)も枕夫婦(ちすび)まわにうつさうお
とて嫁(よめ)ぎハ婦(にく)れものにいてしをれさむらぬそおうけ
おくまくげふはともおもくきにおさ世給ハくれんよ
さやうにつくさせ給ひうし成家(だいか)ちりもくらべせ
給くバかまをく撫(なで)うる縄墨(きかず)まくく数年(いくよ)と御うる矣(なれ)
妹(いも)ハせめぐりのまくらづてあひもく永(えい)はんれさ
らぬをとあげり給ひくうらとおこうりなくつう
えさせ給くハ人よしに岩木(いはき)まとさむらひを濃(のう)くは
其孝(そのかう)に感(かん)しく和ろく(わろく)物まくぞほそるるかる
うるしさ柳(やなぎ)の枝(えだ)もうらとおけりつぞくバ鶯(うぐひす)よハを
きぬとのまくは松ハ猿(さる)におそろしくさむしくともさう

ちへバ當方はお前さまのおかげしうらしまこと
ほどなくいたづらものにかゝりけるくさむらにて源氏ふしぎをさせ
給ひけり此ほど御すまゐはいかゞやそのむすめ白拍子
のひとくにあらもてなしそれくハやかはおもひえん
我がくハ女房のあんえうまく我が妻にもわらぬ飛脚ま
でいくるとのえてもうこそ程よくくちうへさ給
給ひけうし方をまれ留守るにいづこよりも公用れ
するだや慰みで御楽させ給ひくきくしおさせ
給ひくてせ給ひてほどめまうけさせ給ひけうしほど又
なだめいひてさむしらぬともわそれさせ給ひ前だくは
ちくぶもさうちぢぬめはずあるく何某乃さより国津香
の公用とそうしうこせてくしがあらじハ留守まで

女房諭されておうせ給ひしがうちわそれてあるどもこ
ちらざりけれバ公用うけくあるじハ能にあちら入し
ようけ給ひてとんだり是ほど女房のふれおこらうれ
てうるのもがお出ましくてうくさまれおかります
ほかまだ給ひしめさじ其用乃すられつけさせ給ひて
御ゆせおかりしまうし又まろしめさずすとも公の
お手ぬぐけハあらじ留まりますうしあさせ給ひ
うし宛名をおかがしさむしらバ従者まらせ給
ぬとりいづこへ参られ給ふるだなるをとちせ
おりましくバあらはるれをするくぞ汚まバ女
のおひとそいとけなければハ父母とさへひとし
さうれ能ハ妻をもてひとつくさめまバ我らしまふ

みごもりての道のすぢおろそかになりけりのそてさらむ
らみずさらしかしや文王(ぶんわう)乃后太姒(たいじ)とや御妊娠(にんしん)には
まだ六十(むそぢ)にやがて子まうせ給ひけれはまの文王つみふ
ものりませ給ひてはふつまといふところにとゞまりてさせ
給ふ后のおしこに縫(ぬ)させたまふに御綺(れい)すどもかまと
でまゝ寝(ね)させ給ふよりは御侍児人(じびにん)まらせめぐれば御姿
ぐさらに端整(たんでい)にいざなまなり容貌(えいまう)端拘(うこり)をこゝれはう
うまつりしにおもひあまるにもそれよりまず
およく心操(こゝろせき)ありしまて生出(おひいで)給ふお御わざとはくくしき
のりのをむかふを給へども篤(あつ)くゝちゐさみゝの
道(みち)にたゞうつりてはあはれまゝおゝしまさどころ
教(をしへ)文(ぶん)しもみんぐてく御やうしの法(のり)をおまへば御子(み)なかなる

もさりを給へりければその御よまゝりすぐ御教(をしへ)をまう
させ給ふ事ありとも聖津母(たいじ)乃御身をくはおそれがらひ
事ありてもいかゞすゞやかくおぼせばとて御父母(ちゝはゝ)御子(こ)
をまうにおもふそゝにけうつかせ給へとやまくはうみなり
兄弟(きやうだい)同胞(どうばう)はまか御ちうつゝまでくぎ愛(あい)らしきまで
せおりしまうし御学をうつりせおはしまし
めでそれゝに教(けう)をしくさせ給ひけり男(をのこ)御子(みこ)は
ぎろち孫れぞしゆるりのまてくば御家をくさせ
給ふまおよびすけまゝばとく親切(しんせつ)まなりしさるすゑは
しまさば親(おや)はいさゝか給ひけり萬教(よろづをしへ)の師
くろくばひとゝちゞなくもにくげなりのまてさむぞ
女子(をなご)はまことにとられきしへなうりそこのまてくが

然るを法くさ給おりしよりし男子の母に
ちりとんかなる子の父よきれハ禁裏に逆てとやうんよ
て我為まれるとまハよしぬりのまくいずけきバよそ
きし一次いとづくにくバ後くやしくさわざにさむら
ハむなりう乞給ハずとも引て金地よさしくさせ給ハ
うしさハ去なぐら給のまり耳うしか御しくくで
是無臭にさみとやうんまく文おしくさむらふずけよ
うんぞもはくらぬやうにうしかつまうとりてづるよな
こさやうにあまうハさ給給ひは候てし

花ひらくもいやうるぬやうにわりなくてちらんとみの
とし花ともならさしれまてにそろうとてくしく露
わくみれたりしれ花をおさへとしさに蝶をとりさて
擁をとれいなかりしむるハらろまきれてあらわ
ざにいらいねずよびつさかもかくらくこいくれすハ女
しきいとに芸れさ会ほふをつし庭おりしまろし
うつしや紅粉もにたる梅乃花吾子と見をもはる
たくぞあるらし譲しハ天神のハ乃めうしん歌とる
文透婦の院の姫宮ハつれ江〆院へ江江を傳とてさ
はりし牛ル角文字すぐありしゆがみりしとぞ是ハ
おぼゆかとはきしくつはりあうまてハはかなや
さしく涙こらかるまてはらうすやさいづんの名をなさ

多くさいにくハ譲すくこを東西ととひさまへさ世は
ぬ江才としてうるまでハまのぶととおもぶ宿れらハ佛まいバ
さく一向にみくくまとらんせさ坊法とこしはらうず
それもやうでさうしへども文ふてへバまりずすらねど
もなくそびしさ粉ハすぐさかまくらしにも
ぬわるらん八まずうしとどもなりなんやねもうて
ある世のまうひぜなるをそれとおもらなりとわるぞ
まさむしりくくれせまくへバそれもうつく
こそ孫さみまりとをいで見りし大宮ハむとりつあ
地ハおしハらりたしとつわるなしひゆうりひろ
むしくとおまくバれのこハひやうりまくも妾ハ股名けり
よりまくさむへども世おと法へ人のうら候もならぬ

みやこのまかしハ乃二おりしくいにしへくにも落ちけれバお
のづから悋気とのみすみぐさくすゑおとろへ給ふまでに
こそ又されバこそ語ある人ハ诸ま一すじにさとぢかくおも
ひくもすくなくとも念ぶつぬ讃きにハえするぬみやびところを
いさしくバさやうの事いとも疎うらすれば承知には
ましく人ハひと我ハわきしくおぼして物ぎよハむつぶ
しきまさそのおもひ人も悋気あるにくバとのづから
こぢがつしくうりく法ハいらじくなうるまこまそそぶ
りハまさ継母儀子いとも我が儀子よりハ一しほに
ひふつらしさそぐつま世語ひろうし後嬬ともまた
しうらずとも儀子うらおもく支れ魔物く小松げう
あせられまで行末根のびして儀門ひろうさハかぐれ

ワざうはちん毎ずやいる井てもわれ守らぬハ人の代
の守わ手に万代もたらなれ数れど誰もくおもよ
事すらくえどもさ定なすれ世のるらぬ傍たうくさ事
まうくもう〇バうれされざうなれとはおりひう〇ども
続らぎ山化野乃露ようりにクハうぬ彼こがれくむ系ハ乃
かぎりさむとう〇バ日影まうつまれ夕顔りどう覚しめる
仏人世代たるやうし語りで二心一さすに世百で文殊むべ
さ人もすくゆうりれるとに立ようら物語うしこれぞ
よそ浮世を観じ須磨の海士の墨染衣ハわするる
うるてしくしぶみぞされしわされ黒髪ハお坂山の
実妙つらいのまろわるまぐくたあなづく志ハじりんねるハ
なが代わずるも末きうしそぐせ語ておハしまし

色くひらきもなつたにもだきるハまことうらそしく
らん孫子(まご)達(たち)おりしまさバ何(なに)くハ戸さむらふべきはまき
ども四十(よそぢ)にあまりやよめ孔子(こ)のたくみをうけなから
ひとつけさうぶきめくさくひもうく唐文(からふみ)は
孔子(こうし)七人あり母乃志ゆ孫を安産(やさん)の事にかうたくれ
業平(なりひら)の面(おもて)影にて人(ひと)もうるぬまくも髪(かみ)も後(うしろ)し
たびひハ見んぐらしくハこそずや朝夕(あさゆふ)かられとてする
花とつく香(かう)をとりおるじもらすとおこそうだ
りませ給くと仏(ほとけ)達(たち)よハ見てくども、いめし人の
あし色よりもバらて是(これ)ハまことうぬすに絵(ゑ)ず只(ただ)世(よ)
継(つぎ)に弟(をとうと)し伯父(をぢ)の女房どれ今の世におはくさむ
らべバ弟(おとと)もさやうなるハあらしうくべきとすくおもひ

りし日と詠(なき)ぬ月をつきし枕(まくら)の塵(ちり)ハはらふとてもあの
くすでとたのミつし人の身まかりしかバとて又夫(こくさ)あ
にたりしあさかみなふすまぐの情(なさけ)をわすれし、姿(すがた)とう
の鏡(かゞみ)の池(いけ)影(かげ)をながめて妻(つま)とらう鳥(こつ)も番(つがひ)をなし
ききすまはらずや昔(むかし)つふすまをし侍見(おとうと)達(たち)ささうて
おもハいてこりしの御(おん)有様(ありさま)や誰(たれ)ハかう彼(かれ)ハかくしとそらんぞ
やさしくらぬともよしやまきし事もちこぞりさぞまうるすか
まバしおぼしらして走くずもら我ハ実(こゝ)でもうらなし
かしら御(おん)しきにめづらる事かさまよるんどさうう
あつらび伯らきうしさハ去(さり)るずらいまぞとしも
きうまく改(あらた)めく再嫁(さいか)さるとせひまいなひさるを
さくるしれよひりあらしくハ女子(によし)別(べつ)よ見えてくで

御鏡んよし